公共圏とジャーナリズム

――ジャーナリズムの「境界」をめぐるジャーナリズム・システム論の展開と課題――

高　橋　　徹

Ⅰ　ジャーナリズムの「境界」をめぐる問い
Ⅱ　ルーマンのマスメディア論
Ⅲ　公共圏とジャーナリズム・システム論
Ⅳ　ジャーナリズム・システム論の困難が意味するもの

Ⅰ　ジャーナリズムの「境界」をめぐる問い

M・ヴェーバーは一九一〇年に開催された第一回ドイツ社会学会大会における会務報告で、同学会が取り組むべき喫緊の課題として新聞の社会学的研究を挙げている。ヴェーバーはその課題を次のように述べている。「新聞研究におけるわれわれの設問は、結局のところこうです。第一、新聞は現代の人間にその特徴をきざみつけるのにいかなる寄与をなすか。第二、客観的な超個人的文化財（die objektiven überindividuellen Kulturgüter）はいかに影響されるか」

興味深い点ではあるが、少なくともこの問題設定にはジャーナリズムが社会的な信念・知識の形成にどのように関与し、それが同時代の社会をどのように形づくっているのかに対する強い関心がみてとれる。本稿の最終的な関心もまた、社会的な信念・知識を形成する現代的なコミュニケーション構造に迫ることにある。ジャーナリズムの問題について考えることは、そのようなコミュニケーション構造に迫るうえで不可避の登攀路である。

ヴェーバーが象徴的な人物としてイギリスの新聞王ノースクリフ卿に言及していることからもわかるように、二〇世紀初頭は新聞の時代であった。それを受けて、ヴェーバーは社会学会で新聞研究の重要性を訴えたわけだが、その後、第一次大戦を経てラジオ放送が、第二次大戦後にはテレビ放送が開始され、放送メディアが活況を呈する時代が訪れる。現在では、それにインターネットが加わり、報道各社は自社のウェブサイトやポータルサイト、ソーシャルメディアのアカウントからニュースを配信している。このように報道活動を担うジャーナリズムは、多様化するマスメディアの技術と歩調を合わせて発展を遂げてきた。こうした背景のもと、現在でも「マスメディア」という言葉は、しばしばジャーナリズムの同義語として使われている。その一方で、ジャーナリズム研究者を中心に、メディア技術とは切り離し、社会的な使命、役割の観点からジャーナリズムを定義する視点も示されている。例えば、Kovach and Rosenstiel（2001=2002: 13）は、ジャーナリズムが果たすべきは、「市民の自由、そして自治に必要な情報を市民に提供すること」だと述べている。また、根津（2019: 2）によれば、ジャーナリズムとは「報道・論評とそれが発表される時事的な言論の場である」。前者の視点は、自由な市民社会の発展に貢献するというジャーナリズムの社会的な役割を重視するものであり、市民の自由を守るために政府を監視するという「ウォッチドッグ」の役割もま

（Weber 2016: 274=1982: 222）[1]。ヴェーバーが「客観的な超個人的文化財」という言葉にどのような含みを持たせたかは

たそこに含意されているとみてよいだろう。後者の視点は、社会的に重要な時事的問題について報道し、論評するという点にジャーナリズムの特質をみている。

こうしてみるとジャーナリズムには、メディア技術を使って社会に広く情報を伝える「メディア人」としての側面と社会のなかで独自の役割を果たす「職業人」としての側面があることがわかる。それと同時に、この二つの側面がかなり密接に結びついていることも確かである。それがもっとも顕著にあらわれるのが「報道」という営みである。「報道」とは、社会的に（例えば、市民の自由や安全を守るために）重要な時事的問題を広く一般に伝えることである。しかし現在、このことは、技術的な可能性という点からみたとき、かならずしもジャーナリストの独壇場とはいえなくなっている。インターネット上のサービスを用いる一般市民の情報収集・拡散力が高まっているからである。このことは、ジャーナリズムについて考えることと、ジャーナリズムをも包摂する現代の巨大なコミュニケーション状況について考えることを不可分のものにしている。[2]

このような状況において、ジャーナリストによる「報道」とソーシャルメディアのユーザーによる情報の「拡散」はいかなる点で区別されるのだろうか。そこで問われているのは、ジャーナリズムを社会のなかで行われる他の営みと区別し、独自のものたらしめる「境界」の問題である。ジャーナリズム研究のなかでも、このような問いにきわめて自覚的、かつ体系的に取り組んできたのが、ドイツにおいてシステム論の視点からジャーナリズム理論を展開した研究者たちである。ジャーナリズム研究の領域では、一部の先駆的な業績は一九六〇年代にまで遡るが（例えば、Rühl（1969a, 1969b））、特に一九九〇年代に、システム論的なジャーナリズム研究が集中的に展開された。[3] 例えば、B・ブレーバウムは一九九四年の著作『社会システムとしてのジャーナリズム』（Blöbaum 1994）で、ジャーナリズムを社

会のなかで独自の役割を果たす自律した社会システムとして捉えている。「ジャーナリズムというシステムは、社会において一つの機能を引き受けている。このシステムは他の諸社会システムに対してはたらきを提供し、社会と他のサブシステムに対して自らを境界づけているのである」(Blöbaum 1994: 256)。ブレーバウムは、一八・一九世紀の近代化の過程において生じたある問題に対する応答としてジャーナリズムが成立したと主張する。それは社会の内部で相互依存が高まり、コミュニケーションが加速するなかで、社会において構造化や同期化の働きが欠如するようになったという問題である。そこで、アクチュアルな情報を選択し、公共的なコミュニケーションのためにそれを伝える役割を担うジャーナリズムが成立したのだ、とブレーバウムは指摘する(Blöbaum 1994: 261)。

一九九〇年代には、ブレーバウムに加えて、S・ヴァイシェンベルグ、M・コーリング、D・M・ハグ、A・ゲルケらによって相次いでジャーナリズムの社会における役割と自律性を理論的に定式化する試みが提示されている(Weischenberg 1994; Kohring 1997; Hug 1997; Görke 1999)。こうした動きの背景にあるのは、ドイツにおける社会システム論の発展である。すでに一九八〇年代から、社会システム論は、社会の内部にあって重要な役割を担っている諸領域の自律性を描き出す理論枠組みとして展開されている。例えば、社会学者のN・ルーマンは経済システムについて、法社会学者のG・トイプナーは法システムについて独自の理論を提示している(Luhmann 1988=1991; Teubner 1989=1994)。

一九九〇年代におけるシステム論的なジャーナリズム研究の流れに一石を投じたのが、一九九六年に刊行されたルーマンのマスメディア論『マスメディアのリアリティ』(Luhmann 1996=2005)である。一九八〇年代以降、経済を皮切りに科学、法、教育、芸術、政治、宗教を対象としたルーマンのモノグラフ的な研究が発表され、各領域で議論

を刺激してきた。彼のマスメディア論も、そうしたモノグラフの一つである。ジャーナリズム研究の領域では、一九九〇年代後半以降、ルーマンのマスメディア論に対する批判的な応答という側面を持ちながらコーリング、ゲルケ、ハグらによる議論が活発に展開された。詳細は後述するが、彼らはメディア技術を用いて情報を世に広める「メディア人」という側面には頼らずに、ジャーナリズムを独自の社会的役割の遂行によって定義しようとしたのである。彼らの議論の展開には、先ほど述べたジャーナリズムの「メディア人」としての側面と「職業人」としての側面の緊張関係がきわめてよく現れている。

以下、本稿においてはコーリング、ゲルケ、ハグらによって展開されたジャーナリズム・システム論の枠組みを、彼らの批判的応答の対象であるルーマンのマスメディア論と比較しつつ検討する。そこにおいて本稿が注目するのは、彼らの議論にみられるある種の軋みである。そこには現代的なコミュニケーション状況においてジャーナリズムを独自の領域として描き出すことの困難が浮かびあがっている。しかし、その困難は現代社会のコミュニケーション構造に迫る道筋をも示している。

Ⅱ　ルーマンのマスメディア論

一九九六年に刊行された『マスメディアのリアリティ』は、ジャーナリズムの自律性を理論的に定式化することに関心を持つ研究者らによって注目された。本章では、彼らの批判的コメントを交えながら、ルーマンのマスメディア論を概観する。

ルーマンは議論を始めるにあたって、「マスメディア」を次のように定義している。「以下で『マスメディア』という概念によって把握されるのは、コミュニケーションの流布に複製技術を利用する社会のすべての装置（alle Einrichtungen der Gesellschaft）である。とりわけ念頭に置かれるのが、印刷術によって制作された書籍、雑誌、新聞である。あるいは、受け手が限定されていない多数の制作物を作り出す限りで、あらゆる種類の写真および電子的な複写も含まれる」（Luhmann 1996: 10=2005: 8）。ルーマンのこの定義について、コーリングは次のような批判的コメントを行っている。「これ〔このようなルーマンの定義〕によって、システム帰属の基準になったのは、コミュニケーションの技術的な流布方法であって、特殊な意味内容ではない。いいかえると、〔私が書いている〕このテクストがマスメディアのシステムに帰属するのは、（たんに）これが出版されたからだということになる」（Kohring 2016: 170）。ゲルケもまた同様の批判を行っている。「いいかえると、社会システムは技術的な流布を基準として境界づけられるものではないということである。システム境界の規定は、むしろ、適切な意味構造……を特定することによってのみ説得的なものになる」（Görke 2003: 127）。

コーリングやゲルケが批判しているのは、ルーマンがマスメディアの定義にあたって技術的な基準を用いている点である。これに対して彼らが主張しているのは、社会システムの境界は意味的に定義されなくてはならないということである。[4] しかしながら、仔細にみると、ルーマンはマスメディアを技術的な見地からのみ定義しているわけではない。ルーマンは、マスメディアのコミュニケーション的な過程、つまり、マスコミュニケーションの進行を記述するにあたって、マスメディアに特有のコードとプログラムについて論じている。「マスメディアというシステムのコードは、情報と非情報の区別である。このシステムは、情報によって作動することができる。つまり、情報は正の値を

持つのであり、……この値を用いることで、このシステムは自らの作動の諸可能性を表示するのである」（Luhmann 1996: 36=2005: 30）。この場合のコードとは、あるコミュニケーションの過程において積極的な価値を持つものとそうでないものを分ける区別のことである。例えば、法的なコミュニケーションにとっては合法／不法という区別、科学的なコミュニケーションにとっては真／偽の区別が核心的な区別となる。このとき、例えば、何が合法で何が不法かを適切に見極め、「合法」「不法」という二つの値をそれぞれ適切に振り分けなければならない。この水準において基準となるのが、プログラムである。法的なコミュニケーションの場合は、法律に照らして「合法」と「不法」の振り分けが決められる。科学的なコミュニケーションにおいては、科学的な知見をえるための手続き（例えば、研究方法論）に照らして、研究成果が正しく導き出されているかが判断される。正しい研究上の手続きにしたがってえられた研究成果であれば、（将来における反証可能性はあったとしても）さしあたりは「真」として受けとめられる。このようなコードとプログラムによって、当該領域のコミュニケーションは他の領域のコミュニケーションとは異なる、独自の論理で編成される。つまり、外部に対する境界を形成し、当該領域の自律性を確保することができるのである。「社会システム」とは、このように自律的に自己を編成するコミュニケーション過程にほかならない。後述するように、ルーマンが用いるコードとプログラムという概念対はコーリングやゲルケのジャーナリズム理論にも採用されている。

それでは、マスメディアのコードとされる情報的／非情報的という区別の値はどのようなプログラムによって振り分けられるのか。ルーマンは、マスメディアに三つのプログラム領域をみいだしている。すなわち、①ニュース価値を追求するニュースとルポルタージュ、②新しい製品やサービスに関する情報を流布する広告、③日常のリアリティとは異なる新しい体験を提供する娯楽である。本稿のテーマであるジャーナリズムに相当するのは、いうまでもなく

ニュースとルポルタージュである。この領域においてプログラムとしての役割を果たすのは、具体的にいえば、どのようなトピックにニュースとしての価値があるのか、つまりニュース価値を判断する諸基準である。ルーマンはGaltung and Ruge（1965）による先駆的な研究も参照しつつ、独自の諸項目を示している。ジャーナリズムにおけるニュース価値については経験的研究も行われているが、メディア環境の変化もあり、定説といえるものがあるとはいいがたい。**表1**では、ルーマンが挙げている項目に加えて、一例としてT・ハーカップとD・オニールが新聞メディアの研究から提示したリストを併載する（Harcup and O'Neill 2001）。

表1に掲げられた各項目が示唆しているのは、ニュースとなるべきトピックというのは、新しく、人々をあっといわせるような出来事だ、ということである。とりわけそれが、当該メディアがカバーする国や地域に関連のあるテーマであったり、数量的な規模において過去に例のないものであったりした場合には、ニュースとして取り上げられる蓋然性が高まる。また、政財界の有力者や有名な俳優・スポーツ選手など（セレブリティ）の動向、法的・道徳的規範の侵犯（犯罪、ス

表1　ニュース価値リストの例

Luhmann（1996=2005）	Harcup and O'Neill（2001）
新奇性　（例：驚き）	驚き
数量的な大きさ	重大さ
地域にとっての重要性	重要性
特定の人々に対する関心	セレブリティ
意見の表明	パワーエリート
規範の侵犯　（例：スキャンダル）	悪いニュース
道徳的な区別	よいニュース
コンフリクト	娯楽性
話題性	先行する報道に対するフォローアップ
報道機関のルーティン	報道機関が重視するアジェンダ

キャンダル）、政治的な闘争や法的な紛争といったコンフリクトもまたニュースとして取りあげられやすい。ジャーナリズムの自律性を考えるうえで、先行する報道に対するフォローアップや報道機関が重視するアジェンダという項目も興味深い。前者の場合、自社や他社が報じたニュースに対して続報や検証が行われるが、これはまさにニュースがニュースを呼ぶような報道の連鎖を形成する。また、同様の報道の連鎖は、報道機関が重視するアジェンダに関するキャンペーン報道のようなかたちでも生じる。

このようにルーマンの枠組みでは、ジャーナリズムはマスメディアという領域の一部として位置づけられている。それでは、ジャーナリズムは、社会においてどのような役割を果たしているのだろうか。この問いに対する答えは、マスメディアの社会的機能を説明することで示される。「マスメディアが担っているのは、第一に、周知されたもの（Bekanntsein）を作り出し、それを時々刻々と更新することである。それによって、後続のコミュニケーションにおいて〔周知されたものを〕受け入れるか、拒否するか〔という選択〕をあえて誘発することができるのである」（Luhmann 1996: 179=2005: 148）。この説明によれば、マスメディアの機能は、周知されたコミュニケーションの「対象」を、報道された事件・事故、社会問題などのニューストピックなどとして作り出し、それをたえず更新することである。人々はこのような「対象」が存在することを前提とし、コミュニケーションにおいてこれに肯定的にも否定的も言及することができるわけである。

ルーマンは、このように共有されたコミュニケーションのテーマを作り出すことを社会生活にとってきわめて重要なはたらきとみなしている。「社会の安定性（つまり再生産能力）は、第一に後続のコミュニケーションにおいて前提となることができる対象の生成を基盤にしている。……そうした対象が『ある』ことを現代社会はマスメディア・シ

ステムに負っている」(Luhmann 1996: 178=2005: 147)。この点を考慮に入れると、ルーマンがなぜ技術的な条件をマスメディアの定義に含めたのかがわかる。なんらかの技術的な媒体を用いた伝播がなされなければ、広く共有されたコミュニケーションの「対象」を日々新たに作り出すことはできないからである。

Ⅲ　公共圏とジャーナリズム・システム論

Ⅱで示したように、ルーマンの枠組みにおいてジャーナリズムは自らの基準でテーマを選択して報道するという点で一定の自律性を持ってはいるが、大きな枠組みとしてはマスメディアの一領域とみなされていた。それでは、ジャーナリズム研究者たちは、ジャーナリズムをどのように位置づけたのだろうか。コーリングの枠組みでは、ジャーナリズムはある母領域に属する社会的な活動として位置づけられている。そのような領域を、彼は公共圏(Öffentlichkeit)と呼んでいる。「『機能的に分化し、多様化した観察者のパースペクティヴによって特徴づけられる社会において、相互的な環境予期を形成するために出来事のたえざる観察を確保しなければならないという問題に対して、社会は、独自の機能システムの分出をもって応じている』。この機能システムが、ここでは公共圏と呼ばれる。公共圏システムの全体社会的機能は、相互依存、すなわち、機能的に分化した社会の相互的な依存、補完関係に関する観察の生成と伝達にある」(Kohring 2006: 167)。

公共圏に関するこのようなコーリングの理解において決定的に重要なのは、社会の機能的分化というテーゼである。一九八〇年代以降、社会の各領域の社会的な機能と自律性を描くルーマンのモノグラフ的な研究が相次いで発表

されたことは先述したとおりである。こうした大がかりな仕事によって企図されていたのは、近代社会をそれらの各領域が自律化し、多極化した社会（機能的に分化した社会）として歴史的に描き出すことであった。公共圏に関するコーリングの議論は、明らかにこうした社会理論的な構図のもとで行われている。コーリングの考えでは、機能的に分化し、多極化している社会において各領域の相互依存関係や補完関係を描く観察の領域が必要となる。その必要性に答えるかたちで成立したのが、公共圏というコミュニケーション領域なのである。(5)

表現は違うが、ゲルケもまた「同期化の必要」という観点から、公共圏が機能的分化という構造的条件のもとでの要請に応えて成立したものだという認識を示している。「機能システムとしての公共圏は、階層的な分化形態から機能的な分化形態への移行において、機能的分化によってもたらされた同期化の必要（Synchronisationsbedarf）への応答として成立している。公共圏は同期化の機能を充足している。それは、公共圏が他の機能システムの刺激ルーティンを一時的に遮断して、その境界設定を外部からの観察にさらし、機能システムを自らの境界設定の偶発性とあらためて向き合わせることで実現する」（Görke 2003: 128）。機能システムは、通常、それ自体の関心事に専念している。しかしときに、その内部での営みが外部の関心を集め、そのシステムの作動のあり方自体が観察にさらされる場合がある。例えば、国民の利益を顧みずに権力闘争に終始する「永田町の論理」、苛烈な利益追求によって労働者を苦しめ、環境を破壊する「企業の論理」への批判といったかたちで。このとき当該システムは、普段の作動様式が一時的に攪乱され、社会的環境との同期化が行われる。このような契機をもたらす観察をコミュニケーションとして行っている領域が公共圏だ、というのがゲルケの考えである。

公共圏という社会システムの自律性を記述するために、コーリングは「多システム帰属的（mehrsystemzugehörig）／

非多システム帰属的（nicht-mehrsystemzugehörig）」という区別を公共圏のコードとして定式化している。「公共圏システムは、その作動的な閉鎖性を獲得するのだが、それはそのシステムが自らのコミュニケーションを『多システム帰属的』か、あるいは、『非多システム帰属的』なものと示すことによってである」（Kohring 2006: 168）。[6] コーリングのいう「多システム帰属的」というのは、端的にいえば広く一般社会にとって重要性を持つということである。社会には様々な業界や専門領域があるが、その内部において扱われているテーマがことごとく世間一般の関心を呼ぶわけではない。通常は、当該領域の内部で処理され、外部のコミュニケーションにおいてテーマ化されることはない。しかし、例えば、難病の治療法に関する専門的な医学研究の成果は患者や製薬業界、厚生行政にとっても重要な情報となるし、ある業界の長年の商慣行が不適切な取引として問題になる場合もある。このように特定領域の内部で処理されていた事柄が領域の垣根を越えてテーマ化されることがある。コーリングは、このような多領域的な重要性を持つテーマに関するコミュニケーションの領域を公共圏と呼んでいるわけである。

コーリングの枠組みにおいて、ジャーナリズムは公共圏とコードを共有し、公共圏と同一の社会的機能を専門的に遂行するコミュニケーション活動とみなされている。「システム内部でさらなる構造形成をすることなしにその機能を充足できる機能システムはありえないだろう。それゆえ、組織化された遂行的役割（遂行システム Leistungssystemen）が設立されることになる。公共圏という機能システムにおいて、ジャーナリズムはこうした遂行的役割を引き受けている」（Kohring 2006: 169）。定義上、公共圏は「多システム帰属的」なテーマに関するコミュニケーションからなる。これは、ジャーナリストだけが公共圏の担い手ではないということを意味する。なぜなら、ジャーナリストではない一般の市民が、口頭で、あるいはソーシャルメディアを用いて（ニュースに対してコメントす

るなどして）「多システム帰属的」なテーマについて語ることもあるからである。公共圏自体は、そのような無数の非ジャーナリズム的コミュニケーションを含んでいる。その一方で、コーリングは、公共圏がその社会的な機能を充足するためにはジャーナリズムによる専門的な活動が不可欠であるとも考えている。それを表現するために、コーリングは「遂行システム」という用語を使い、「ジャーナリズムは公共圏のもっとも重要な遂行システムである」と述べている（Kohring 2016: 172）[7]。つまりコーリングは、多領域的な重要性を持つテーマを社会に提起するという公共圏の機能を遂行するうえでジャーナリズムは欠かせない存在だと考えているわけである[8]。

ジャーナリズムが公共圏のはたらきを（「遂行システム」として）専門的に担う活動たりうるためには、潜在的なニューストピックが持つ政治的、経済的なインパクト、法的な問題の有無などを考慮し、そのテーマの多領域的な重要性を判断することができなければならない。コーリングは、そうした重要性を当該領域にとっての関連性（Relevanz）と表現している（Kohring 2006: 174）。もちろん、そのトピックは、まだ人々に知られていない新しい事態に関する情報でなければならない。コーリングは、ニュース選択の基準について、ニュース価値論のように具体的な項目を列挙するスタイルはとらず、ジャーナリズムが判断する情報の新しさと社会的な関連性を重視している。「新しさと関連性という基準は、ジャーナリズムのプログラムの水準に位置している。これらの基準によって、コードの割り当てを扱うことが可能になるのである」（Kohring 2006: 173）。

ジャーナリズムに対するシステム論的なアプローチを共有するハグも「遂行システム」という用語を用いて公共圏とジャーナリズムの関係を記述している。ハグは、その内実を次のように説明している。「ジャーナリズムは公共圏システムの遂行システムである。ジャーナリズムの分出、すなわち、ジャーナリズム的実践の職業化、ジャーナリズ

ムに特有のコミュニケーション形式の形成、編集局という形式での社会的組織の成立……は、公共圏システムの持続的なコミュニケーションにとって必要不可欠な諸条件である」（Hug 1997: 335–336）。コーリングと同様に、ハグもまたジャーナリズムを公共圏にとって不可欠の専門的コミュニケーション活動だとみなしているが、公共圏とジャーナリズムのコードの定式化においては相違もみられる。ハグの議論において、公共圏とジャーナリズムのコードは、環境関連性（環境関連的 umweltrelevant／非環境関連的 nicht umweltrelevant）である（Hug 1997: 331）。これは、ある特定の社会システムに属するテーマが、その環境である社会にとっても重要性があり、公にテーマ化するに値するかどうかという区別である。ハグの定式化はコーリングのそれに比べると機能的分化というテーゼを背景とした多極的社会像が希薄にはなっているが、あるテーマが特定領域に限定されない重要性を持つかどうかに焦点づけしている点ではコーリングの定式化とよく似ている。

他方、ゲルケは、コーリングの議論に依拠しながら複雑性の落差（Komplexitätsgefälle）という言葉を使って公共圏とジャーナリズムの関係を記述している。「ジャーナリズム／公共圏のシステム–環境–差異という観点でも複雑性の落差が観察される。なぜなら、公共圏というシステム領域には、例えば（おしゃべり、会話、うわさ話のような）公共圏の原型的な形式も含まれるからである。これらは、ジャーナリズムとしては通用しないのである」（Görke 1999: 301）。環境とシステムの間に「複雑性の落差」があるということは、環境（公共圏）に比べてシステム（ジャーナリズム）はその内部で実現できる諸可能性を切り詰めなければならないことを意味する。つまり、ジャーナリズムは人々の日常会話までを含む多様な公共圏のコミュニケーションにおいて言及されるすべてのテーマを取り上げることができない、ということである。「マスメディアは大事なことを報道しない」という人々の不満は、この落差の表れであると

もいえよう。ゲルケの場合、公共圏とジャーナリズムのコードは、アクチュアリティ（Aktualität）である（Görke 1999: 315）。例えば、国会が紛糾して国民生活に必要な法案の審議が進まない、過重労働をもたらす企業の労働慣行がなかなかあらためられないとき、社会にとって看過できない諸問題がそれらの領域で起きていることになる。それらをただ成り行きにまかせておくのでないならば、ジャーナリズムは報道によってその問題を共有し、当該領域に状況の改善を求める。そのとき、社会的にみれば当該領域とその環境にあたる社会との間で「同期化の必要」が生じており、ジャーナリズムの側からみれば、まさにそのテーマがアクチュアリティを帯びている、ということになるわけである。

そもそも、ある社会領域において社会との「同期化の必要」が生じていることを把握し、「アクチュアル」なトピックを選び出すためには、ジャーナリズムは当該領域の視点と他の社会領域の視点をそれぞれ一定の精度で理解できなくてはならない。「多システム帰属性」という概念設定から同様の問題に取り組んだコーリングは、ジャーナリズムは「プログラムの水準において他のシステムの視点に関する比較的強く単純化されたシミュレーション」を行っているのだという仮説を打ち出しており、ゲルケもこれを採用している（Kohring 1997: 256; Görke 1999: 320）。それは例えば、ジャーナリズムはある問題が政界にどんなインパクトを与えるか、司法当局は動くのか、経済や家庭生活にも影響があるのかといった点を、各領域の視点を取り入れて判断するということである。見方を変えていえば、研究者によるジャーナリズム理論の構築も学問的な関心のもとで行われた「シミュレーション」の一種であり、現実のジャーナリズムを細部まで反映したものではない（Kohring 1997: 256 Anm. 47）。同様の単純化は、ジャーナリズムが行う「シミュレーション」においても生じるだろう。とはいえ、そのようにしてジャーナリズムは各領域の視点を取

り入れて報道に値する「アクチュアル」なトピックを選び出すわけである。

そのようにして選ばれた「アクチュアル」なトピックは、より具体的な基準のもとで、さらにふるいにかけられる。これはジャーナリズムのプログラム水準における選択にあたる。コーリングとは異なり、ゲルケはこの点について具体的な基準に言及している（Görke 1999: 322–328）。一つは、そのニューストピックが人物を軸にして描けるかという点である。ニュースはしばしば具体的な人物の動静や経験を軸にして描かれる。個々の出来事の背景に複雑な要因があったとしても、人物を軸としたナラティブによって、ニュースのストーリーではその複雑性を縮減することができる。さらに、善悪にまつわる道徳的な区別もニュースにおいてしばしば稼働する。困窮した人々への心温まる支援や許しがたい犯罪の容疑者の人物像など、ニュースの素材としてはおなじみのものである。日本では様々な会見が開かれ、それがニュースになることがある。各種の会見がニュースになりやすいのは、それがオーディオビジュアル的な素材を提供するからでもある。コメントだけでなく、映像や音声、写真といった素材も取得できるのは、ニュースメディアにとって魅力的だからである。

最後に、ルーマンのマスメディア論との比較において重要なメディア技術の位置づけについてふれておこう。コーリングは、「『マスメディア』において読まれ、聴かれ、観られているすべての事柄がジャーナリズムだとはいえない」（Kohring 2016: 174）と指摘する。我々がマスメディアを介して接触するコンテンツは、ニュースだけではなく娯楽や広告も含まれることを考えれば、この点に異論はないだろう。それでは、マスメディアによる媒介を受けないジャーナリズムのコミュニケーションもありうるのだろうか。コーリングは、この問いに肯定的に回答する。「ジャーナリズム、あるいは、公共圏のコミュニケーションは、マスメディアとは等値されえない。――つまり、そうしたコ

ミュニケーションは、いわゆるマスメディアなしにも表象可能なのである」（Kohring 2016: 171）。たしかに、ジャーナリストによる対面的状況での講演会や取材報告会のような例を考えれば、マスコミュニケーションの外部にジャーナリズムのコミュニケーションをみいだすこともできるだろう。このようにマスコミュニケーションとジャーナリズムの双方に他方の一部ではない残余がある。コーリングが、ジャーナリズムをマスメディアから切り離して定式化したのはそのためでもある。

Ⅳ　ジャーナリズム・システム論の困難が意味するもの

ルーマンのマスメディア・システム論は、印刷や放送などのマスコミュニケーション技術を使って情報を流布し、共有された社会的リアリティを生成することに焦点をあててマスメディアの機能を描くものだった。これに対してコーリングやゲルケは、ルーマンがマスメディアの定義に技術の使用を含めたことを批判し、社会システムの境界は意味的に定義されるべきだと主張した。対案として、コーリングは多システム帰属性、ハグは環境関連性、ゲルケはアクチュアリティをコードとして用いる社会観察のコミュニケーションからなる公共圏システムを定式化し、その内部にジャーナリズム・システムを位置づけた。

公共圏がコーリングらのジャーナリズム理論において核心的な位置を占めることは既述のとおりだが、ルーマンは自身の理論枠組みをふまえたD・ベッカー（Baecker 1996）の公共性（Öffentlichkeit）概念[9]を採用して次のように述べている。「そこで公共性とは、ディルク・ベッカーの提案に従うならば、あらゆる社会内部にあるシステム境界の再

帰的省察として定義することができる」（Luhmann 1996: 184 = 2005: 153）。「ディルク・ベッカーは、……公共的なもの（Öffentlichen）の特徴を、全体社会内の諸システム境界についての反省……という点に見いだそうと提案している」（Luhmann 2000: 284–285=2013: 348–349）。つまり、ルーマンにとって公共性は社会の内部で作動している様々なシステムの境界に対する反省的な観察を記述する概念である。ベッカーの言葉も引いておこう。「境界の観察は、決定不可能なものの決定を社会システムに帰属すること〔境界形成をその社会システムに帰属すること〕にほかならない。社会システムは、そうした境界画定によって分出しているのである。公共性の観察を観察することによって、境界画定をその人為性とコンティンジェンシーという観点のもとで観察することが可能になる」（Baecker 1996: 97）。

ベッカーは機能システムに限らず、社会内で自律的に作動している（組織や相互作用も含む）すべての社会システムはそれぞれ独自の公共性を持つと考えている。つまり、どの社会システムについても、その内部と外部の境界がどのように引かれているのか（内部と外部の差異）が観察の対象になりうるということである。そうした観察によって、当該システムの営みは反省の対象となる。システムの内部で自明視されている規則や慣例は相対化され、なぜそうなのか、他のやり方はないのかという問いに付される。ゲルケならそれを当該システムと社会の「同期化」として記述するだろう。コーリングなら、そのような反省的観察によって諸領域の相互関係を観察することにつながると主張するだろう。その意味で、三者はそれぞれ社会におけるシステム／環境–関係の観察という通底する問題に取り組んでいる。しかし、ベッカーは、次の一節に端的に表れているように公共性を一つの自律した社会システムとはみなしていない。「公共性はシステムではない。公共性は、近代社会の自己記述の観察様式の一つである」（Baecker 1996: 99）。

ベッカーやルーマンにとって、公共性はコーリングやゲルケが主張するように自律したコミュニケーション領域で

はなく社会の自己記述を観察する一様式である。それはまた、システムがみずからの営みを反省的に問うことに対して開かれていることを意味する概念でもある。その種の観察はジャーナリストのものに限らず、いたるところで行われうるし、マスメディアによって媒介される必要もない。公共的なコミュニケーションのそうした遍在性は、コーリングの枠組みにおいても考慮されている。だからこそ、コーリングの理論にとって、ジャーナリズムを公共圏の内部にありながらも独自のシステムとして定式化することが核心的な課題となる。しかし、コーリングによって公共圏に対するジャーナリズムの自律性は十分明確に描かれているとはいいがたい[10]。彼の説明では、公共圏に対するジャーナリズムの自律性を担保するのは「新しさ」と「関連性」というニュース選択の基準（プログラム）であり、ジャーナリズムに独自のコードがあるわけではない。ルーマンはそのような領域をプログラム領域と呼び、コードとプログラムの両方を備えた機能システムから区別している。もしプログラムのみによって公共圏内でジャーナリズムがシステムとして自律化しているというのであれば、その点に関する独自の概念的道具立てが必要になるだろう。

コーリングの理論に内在するこのような困難は何を意味するのだろうか。糸口として、現代のメディア環境における公共圏を考えてみよう。我々が日々接しているソーシャルメディア上でのやりとりを思い起こせば、そこでは単なるおしゃべりの次元を越えて様々な現場経験や専門知識を持つユーザーによる情報提供がなされている。提供される情報のなかには、当該ユーザーが居住する地域、従事する業界、専門領域にとどまらない社会的な「関連性」を持つ情報も含まれる。実際、重要な情報を公表したユーザーに対してジャーナリストから取材が行われることもある。このとき、ジャーナリズムの内部と外部はどのように区別されるのだろうか。おそらく常識的には、いわゆる報道機関に属する記者やフリーランスで取材・報道活動に従事するジャーナリストによる報道がジャーナリズムである、と考

えられるだろう。ジャーナリズム研究者のP・ブライトンとD・フォイは、研究の過程で何度となく「なぜこれがニュースなのか（Why is this news?）」と問いかけられたという。戸惑いを示しながらも彼らが示している答えは、「それがまさにニュースだからだ（It just is!）」というものである（Brighton and Foy 2007: 194）。いずれのケースにおいても、根底にはある種の循環論法がある。つまり、「ジャーナリストが報道すればそれがジャーナリズムである」、「ニュースはニュースだ」という論理である。「ジャーナリズムとは何か」という根本的な問題はこれまでも人々の頭を悩ませてきたかもしれないが、現代のメディア環境は、ある意味でこの問題を以前よりも浮き彫りにしている。なぜなら、職業的なジャーナリストが報道しなくとも、インターネットを介したコミュニケーションによって多数の人々の間に情報を共有することが可能だからである。このような状況は、ソーシャルメディアで情報が「公表」「拡散」されることとジャーナリストによって「報道」されることの違いは何かという問いを喚起する。情報の「伝播」という次元では、両者の違いを見極めるのが困難になりつつあるからである。

そうだとすると、コーリングらが考えたように、メディア技術を使った情報の「伝播」力は、もはやジャーナリズムにとって核心的な意味を持たないことになる。冒頭でもふれたようにジャーナリズムがメディア技術と歩調をあわせて発展してきたことを考えると、これは大きな転換である。コーリングの理論が直面しているのは、まさにこうした状況において、公共圏に対するジャーナリズムの独自性・自律性をどのように定式化するのか、という問題である。このようなジャーナリズム理論の展開をみたときに興味深いのは、一九九〇年代前半に発表されたブレーバウムの理論と一九九〇年代後半以降に展開されたコーリングらの理論の違いである。既述のように、前者は社会におけるジャーナリズムの自律性を直接的に定式化しようとしたのに対して、後者は公共圏とそれに内属するジャーナリズム

という二階建ての理論構成をとったのである。一九九〇年代半ばにインターネットの爆発的な普及が始まり、その後、オンライン公共圏に関する議論が活発化したことを考えると、ジャーナリズムの外部にも広大な公共圏が広がっていることを示唆するコーリングらの理論構成は現代のメディア・コミュニケーションの環境に即したものといえる。

ジャーナリズム・システム論の研究状況を概観した近年の論文において、コーリングは、二〇〇〇年代の半ば以降、この領域の理論的な発展が停滞期に入っていることを率直に指摘している（Kohring 2016: 173）。それは、インターネット（とりわけ二〇〇〇年代以降のソーシャルメディア）の出現に伴って変化しつつある社会の全体的なコミュニケーション状況においてジャーナリズムがどのような役割をみいだすのか、その帰趨が依然として不明瞭であることを示しているようにもみえる。経験的研究に眼を転じてみると、先に言及したハーカップとオニールは、**表1**に示したニュース価値リストを更新し、新たに「シェアビリティ（shareability）」という項目を追加している（Harcup and O'Neill 2016: 13）。これは、ソーシャルメディア上で関心を呼んでシェアされやすいことが、新たなニュース価値となっているということである。この指摘は、ソーシャルメディアにおける関心が、ジャーナリズムのニュース選択に影響を及ぼし始めていることを示唆している。メディア横断的な議題設定（intermedia agenda settings）に関する研究は、ジャーナリズムと（ブログやTwitterなどからなる）ブロゴスフィアの間でトピックの相互調達の関係が形成されていることを指摘している（Messner and Distaso 2008）。両者の関係については、例えば、ブロガーたちはメインストリームのニュースメディアからのトピックの調達に依存しているという指摘（Leccese 2009）もあれば、伝統的なニュースメディアの記事よりもオリジナルのトピックに関心を寄せるようになっていると指摘する研究もある

（Watson 2012）。こうしたなかで、ジャーナリストの役割を、伝統的なニュースの門番（gatekeeper）からニュースの見張り番（gatewatcher）へ再定義することも提案されている（Bruns 2003, 2018）。後者は、ソーシャルメディア発のものも含めた様々なトピックを観察し、有益なものを人々に「ニュース」として紹介するニュース・キュレーター的な役割を意味する。[11]

しかしこのような再定義によっても持続する問いがある。それは、「なぜこれがニュースなのか（Why is this news?）」という問いである。この問いは、ジャーナリズムがマスメディアを掌握し、事実上唯一の「ニュース」生産者であった時代から伏在していた。しかし、インターネット上に公開される様々な情報がニュース・キュレーションの対象となることで、なぜあるトピックが「ニュース」となり、他のトピックはそうならないのかという問いは以前よりも顕在化しやすくなる。このニュース／非ニュースの境界をめぐる問いは、コーリングの理論が直面した公共圏とジャーナリズムの境界の問題においても立ち現れる。公共圏では、無数の社会的に重要なテーマが語られているからである。ニュースをめぐっては、人々が各自の端末でそれぞれの興味関心を忙しく追求しているとき、限られたテーマに「公衆」の注意を大規模に引きつける情報伝達の様式がこれまでどおり成立しうるのかという問いも浮上する。しかし、これらの問いを、伝統的なマスメディアのモデルにあわせて「解決」されるべき問題と考えるべきではないだろう。むしろ、これらの問いは、現代のコミュニケーション状況においてジャーナリズム、いいかえれば時事的な共有知の形成が不可避的に直面する社会的条件を指し示している。そしてこの条件に向き合うことは、さらなる理論的前進の出発点となるはずである。

（1）　引用した外国語文献で邦訳書のあるものは参照し、該当頁数を割注に示した。ただし、引用文についてはかならずしも邦訳書にはしたがっていない。引用文中の〔　〕内は引用者による挿入である。なお、翻訳書の底本が参照できなかった場合は、私が参照した原書の頁数を示した。また、引用文中の割注は煩瑣になるため省略した。

（2）　このこともふまえ、本稿では、議論の焦点を明確にするため、報道を主たる対象として検討を進めることにする。

（3）　メディア技術を用いた公開（Publizierung）による独自のシステム形成に着目したF・マルツィンコウスキの著作（Marcinkowski 1993）もこの時期に発表され、ジャーナリズム研究者によって注目された。ドイツのジャーナリズム研究におけるシステム論の導入に関しては、林（2003, 2005）も参照。

（4）　ゲルケとコーリングがこのような視点を打ち出した初期の文献として、Görke und Kohring（1996: 17）参照。社会システムの境界は意味的に定義されるべきだという見地からは、ルーマンとともにマルツィンコウスキも批判の対象となっている（Kohring und Hug 1997: 31; Kohring 2004: 193–194）。日本では林（2002: 119）がルーマンについて同様の批判を行っている。

（5）　ルーマンは、社会の内部で分出しているシステムとその環境の相互依存を観察するシステムは存在しないと考えた。「環境との相互依存を知覚するためのサブシステムは社会には欠けているのである。機能的分化において、そうしたサブシステムが存在することはありえない。というのも、そのようなサブシステムが存在するとしたら、社会それ自体がその社会のなかにもう一度現れることを意味するからである」（Luhmann 1984: 645=1995: 869）。コーリングは、この点を批判し、公共圏こそがそのような観察を担う独自の領域だと論じている（Kohring 2006: 167, Anm.3）。J・ゲアハルツも、公共圏が社会における独自の部分システムたりうるかという検討を行っているが、彼は公共圏の分出はマスメディアの形成によって初めて可能となるという見解を示している（Gerhards 1994: 84）。これに対して（後述するように）、コーリングはマスメディアの外部にも公共圏をみいだしている。

（6）　この定式化は、複数の領域において同時に意味を持つような出来事の観察に関するルーマンの議論を下敷きにしている。「観察の特別なはたらきは、とりわけ、多システム帰属性（Mehrsystemzugehörigkeit）を持つ出来事を統一体として同定しうるという点にある。……観察者は、政治的に誘導された法改正を統一体として観察できるし、支払いを法的義務の履行と捉えることもできる」（Luhmann 1990: 88–89=2009: 74–75）。

（7） 筆者が確認した限りで、コーリングがジャーナリズムの記述において「遂行システム」という用語を最初に使ったのは Kohring（1997: 251）である。

（8） もっとも、ジャーナリズムがある出来事に「多システム帰属性」をみいだして報道したとしてもオーディエンスが同じように受け止めるか否かは別である。「報道された出来事が、実際にも多システム帰属性を持つものとして知覚されるか、そのような文脈で慎重に受け止められるかを決めるのは、ジャーナリズムの［オーディエンスである］公衆に他ならない」（Kohring 2016: 172）。

（9） 原語では、コーリングとルーマンはともにÖffentlichkeitという同一の言葉を用いているが、その意味内容は異なる。前者がÖffentlichkeitをある特質を持つコミュニケーションの領域として定式化しているのに対して、後者はシステム境界に対する反省的な観察の様式として捉えている。ここでは両者の定式化の違いを考慮して前者の意味で述べる場合は「公共圏」、後者については「公共性」と訳し分けることにする。

（10） 林（2003: 56）は、ゲルケの議論について同様の指摘をしている。

（11） ニュースの選択性の問題ではなく、ニュースの「事実」性に焦点をあてた議論も行われている。伊藤（2018）は、現在のメディア環境の変化によってジャーナリズムは厳しい挑戦を受けているという認識のもとで、ルーマンの社会システム論を援用してジャーナリズムが報じる「現実」の被構築性を論じている。

文　献

Baecker, D., 1996, “Oszillierende Öffentlichkeit,” in: R. Maresch（Hrsg.）, *Medien und Öffentlichkeit: Positionierungen, Symptome, Simulationsbrüche*. Berlin: Boer, S.89–107.

Blöbaum, B., 1994, *Journalismus als soziales System: Geschichte, Ausdifferenzierung und Verselbständigung*. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Brighton, P. and D. Foy, 2007, *News Values*. London: Sage.

Bruns, A., 2003, Gatewatching, “Not Gatekeeping: Collaborative Online News,” *Media International Australia*, 107: 31–44.

Bruns, A., 2018, *Gatewatching and News Curation: Journalism, social media, and the public sphere*. New York: P. Lang.

Galtung, J. and M. H. Ruge, 1965, "The Structure of Foreign News," *Journal of Peace Research* 2: 64–91.

Gerhards, J., 1994, "Politische Öffentlichkeit: Ein system- und akteuerstheoretischer Bestimmungsversuch," F. Neidhardt (Hrsg.), *Öffentlichkeit, öffentlich Meinung, soziale Bewegungen. Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie Sonderhefte* 34: 77–105.

Görke, A., 1999, *Risikojournalismus und Risikogesellschaft: Sondierung und Theorieentwurf*. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Görke, A., 2003, "Das System der Massenmedien, öffentliche Meinung und Öffentlichkeit," K.-U. Hellmann, K. Fischer, and H. Bluhm (Hrsg.), *Das System der Politik: Niklas Luhmanns politische Theorie*. Wiesbaden: Westdeutscher Verlag, 121–135.

Görke, A. und M. Kohring, 1996, "Unterschiede, die Unterschiede machen: Neuere Theorieentwürfe zu Publizistik, Massenmedien und Journalismus," *Publizistik* 41: 15–31.

Harcup, T. and D. O'Neill, 2001, "What is News: Gaining and Ruge Revisited," *Journalism Studies*, 2(1): 261–280.

Harcup, T. and D. O'Neill, 2016, "What is News: Gaining and Ruge Revisited (again)," *Journalism Studies*, 18(12): 1470–1488.

林香里, 2002,『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』新曜社

林香里, 2003,「ルーマン理論とマスメディア研究の接点—ドイツの『コミュニケーション学』の動向」『思想』951: 48–63

林香里, 2005,「訳者改題 ルーマン理論とマスメディア研究の接点—ドイツの『コミュニケーション学』の動向からみた本書の占める位置」N・ルーマン（林香里訳）『マスメディアのリアリティ』木鐸社, 181–201

Hug, D. M., 1997, *Konflikte und Öffentlichkeit: Zur Rolle des Journalismus in Sozialen Konflikten*. Opladen: Westdeuscher Verlag.

伊藤高史, 2018,「社会学的ジャーナリズム研究の再検討—ニクラス・ルーマンの社会システム論からの考察」『法学研究』, 19(6): 29–52

Kohring, M., 1997, *Die Funktion des Wissenschaftsjournalismus: Ein systemtheoretischer Entwurf*. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Kohring, M., 2004, "Journalismus als soziales System: Grundlagen einer systemtheoretischen Journalismustheorie," M.

Löffelholz (Hrsg.), *Theorien des Journalismus: Ein diskursives Handbuch*, Wiesbaden: Westdeutscher Verlag, 185–200.

Kohring, M., 2006, "Öffentlichkeit als Funktionssystem der modernen Gesellschaft: Zur Motivationskraft von Mehrsystemzugehöhrigkeit," A. Ziemann (Hrsg.), *Medien der Gesellschaft - Gesellschaft der Medien*. Konstanz: UVK, 161–181.

Kohring, M., 2016, "Journalismus als Leistungssystem der Öffentlichkeit," M. Löffelholz and L. Rothenberger (Hrsg.) *Handbuch Journalismustheorien*. Wiesbaden: Springer, 165–176.

Kohring, M. und D.M. Hug, 1997, "Öffentlichkeit und Journalismus. Zur Notwendigkeit der Beobachtung gesellschaftlicher Interdependenz, " *Medien Journal* 21(1), 15–33.

Kovach, B. and T. Rosenstiel, 2001, *The Elements of Journalism: What newspeople should know and the public should expect*. New York: Crown.（加藤岳文・斎藤邦泰訳, 2002,『ジャーナリズムの原則』日本経済評論社）

Leccese M., 2009, "Online Information Sources of Political Blogs," *Journalism & Mass Communication Quarterly*, 86(3): 578–593.

Luhmann, N., 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.（佐藤勉監訳, 1993–1995,『社会システム理論 上・下』恒星社厚生閣）

Luhmann, N., 1988, *Die Wirtschaft der Gesellschaft*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.（春日淳一訳, 1991,『社会の経済』文眞堂）

Luhmann, N., 1990, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.（徳安彰訳, 2009,『社会の科学1・2』法政大学出版局）

Luhmann, N., 1996, *Die Realität der Massenmedien*. Opladen: Westdeutscher Verlag.（林香里訳, 2005,『マスメディアのリアリティ』木鐸社）

Luhmann, N., 2000, *Die Politik der Gesellschaft*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.（小松丈晃訳, 2013,『社会の政治』法政大学出版局）

Marcinkowski, F., 1993, *Publizistik als autopoietisches System: Politik und Massenmedien. Eine systemtheoretische Analyse*. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Messner, M. and M.W. Distaso, 2008, “The Source Cycle: How traditional media and weblogs use each other as sources,” *Journalism Studies*, 9(3): 447–463.

根津朝彦，2019，『戦後日本ジャーナリズムの思想』東京大学出版会

Rühl, M., 1969a, *Die Zeitungsredaktion als organisiertes soziales System*. Bielefeld: Bertelsmann Universitätsverlag.

Rühl, M., 1969b, “Systemdenken und Kommunikationswissenschaft,” *Publizistik* 14: 185–206.

Teubner, G., 1989, *Recht als autopoietisches System*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（土方透・野崎和義訳，1994，『オートポイエーシス・システムとしての法』未來社）

Watson, B.R., 2012, “Bloggers Rely on Sources Outside Traditional Media,” *Newspaper Research Journal*, 33(4): 20–33.

Weber, M., 2016, “Geschäftsbericht der Deutschen Gesellschaft für Soziologie,” *Max Weber Gesamtausgabe*, Bd.13, J.C.B. Mohr, 256–286.（中村貞二訳，1982，「ドイツ社会学会の立場と課題」『完訳・世界の大思想1　ウェーバー　社会科学論集』河出書房新社，205–234）

Weischenberg, S., 1994, “Journalismus als soziales System,” K. Merten, S.J. Schmidt und S. Weischenberg (Hrsg.), *Die Wirklichkeit der Medien*. Opladen: Westdeutscher Verlag, 427–454.

【付記】この研究は、中央大学特別研究期間制度、および櫻田會政治研究助成の支援を受けて行われた。また、この原稿は、二〇一九年九月一三日にウルビーノ大学（イタリア）にて行ったセミナー講演“Journalism and Social Systems Theory: A theoretical and empirical reconsideration”の原稿をもとに大幅に改稿したものである。関係各位には、記して謝意を表したい。

（本学法学部教授）